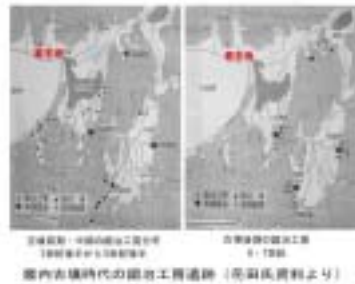


尼崎市 若王寺 2005.6.8.



1. 「古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡」概要

尼崎史誌・兵庫県埋蔵文化財センターの調査報告&現地説明史料などより

2. 古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡 Walk

私の出身地 尼崎の北部「若王寺」に古墳時代の先進鍛冶工房集落があった。

尼崎北部は原始・古代の大阪湾海岸線であり、猪名川が分流する河口の低湿地帯で 弥生の大集落「田能遺跡」はじめ、数多くの遺跡が営まれた。

また、「若王寺」には江戸時代の文豪「近松門左衛門」の墓のあり、「近松の里」と呼ばれている。

この尼崎北部の一体に幾つかの古代遺跡があることなど聞いていましたが、「古墳時代 鉄器の大量実用化が始まる「鉄の時代」をリードする先進鍛冶工房があった・・・」とは全く知りませんでした。

周辺の市街地 「若王寺」「久々地」「上坂部」「下坂部」とすぐ名前はでてくるのですが・・・

「名神高速道路沿いの旧電気試験所の所在地」に古代の鉄の先進工房があったとは・・・

私たちの年代が育った「尼崎」は阪神工業地帯の中核工業都市「鉄の街 尼崎」。

そこに古代の鉄の先進工房が眠っている。



若王子遺跡のある尼崎北部 周辺図

阪神工業地帯の中核工業都市「鉄の街 尼崎」

そんな尼崎の古代にも「鉄の街」があった事知っている人はほとんどいないだろう。

そんな故郷に 思いをはせながら

「古代 たたら製鉄が始まった頃の痕跡が見つかるかもしれない」

「若王寺」界隈が今どうなっているのか

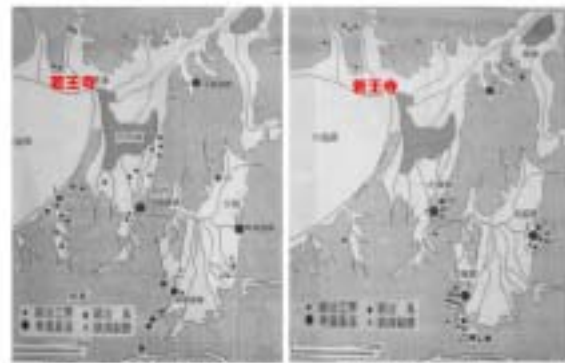
そんな興味で歩いてきました。

3世紀後半～6世紀末にかけての古墳時代 大和王権成立の前夜である。日本各地で大和王権に連なる豪族支配の象徴として数多くの前方後円墳が作られるが、これらの大土木工事を支えたのは鉄器の大量実用化であった。国内では未だ鉄の大量自給が出来ていないが、朝鮮半島からの鉄材供給・鉄器鍛冶加工技術集団の渡来などにより実用鉄器が急速に広がる。そして 5世紀末から6世紀国内での鉄の自給がはじまり、鉄器の実用が益々拡大する。そんな 実用鉄器の大量普及のこの時代 畿内には大規模な鉄器供給の役割を果たす鉄鍛冶工房や専用集落が数箇所出現する。

大阪湾がまだもっと内陸部に入っていたこの頃 大和王権の本拠となる河内・大和の大和川流域の大泉・忍海脇田・布留そして淀川流域の中流交野・森などに大規模な鉄鍛冶工房の集落が出現し、猪名川流域の河口湿地帯 現在の尼崎市若王寺にもそんな鉄鍛冶工房の村が出現し、実用鉄器供給の役割を果たした。

鉄鍛冶ばかりでなく、土器・埴輪作り 玉作りなど当時の先端技術の専用工房が出現し、畿内や日本各地に広がってゆく。「鉄の6世紀」と呼ばれる時代の到来はそんな鍛冶集団の存在によって鉄の大量自給が始まり、そして、鍛冶などの先端技術集団を支配下に置いた大和王権が日本統一を果たして行く。

でも、未だに、「国内での製鉄が何時から どのような技術で始まったのか」良く判っていないが、大量の鉄素材の使用が始まる専用工房はそれを解く鍵を握っていると思っている。



畿内古墳時代の鍛冶工房遺跡（花田氏資料より）

今は海岸線がはるか南になり、尼崎市の北部の市街地になっているが、当時は大阪湾の海岸線に近い猪名川流域の河口にあたり、ここから猪名川流域の伊丹・川西に多くの集落や渡来集団が住んでいた。若王寺はその南端にあり、若王寺遺跡に隣接してこの地の豪族の墓で阪神間最大の前方後円墳 伊居太古墳や弥生から古墳時代松まで続く複合集落下坂部遺跡などがある。

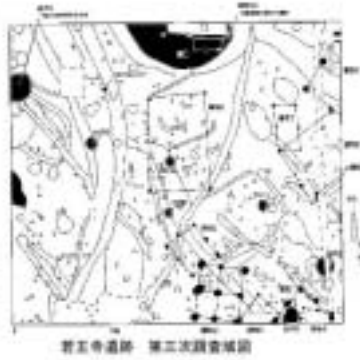
現在 若王寺遺跡は関西電力技術総合研究所ならびに産業技術総合研究所関西センター(旧電子技術総合技術研究所)の建物の下になっている。

これらの建物の建設に合わせ過去に3回の発掘調査が行われたが、現在は敷地の際に「若王寺遺跡」の説明居太があるのみである。



1. 「古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡」 概要

尼崎史誌・兵庫県埋蔵文化財センターの調査報告&現地説明史料などより



若王寺遺跡は弥生時代後期 3 世紀後半から古墳時代後期 6 世紀末まで継続する遺跡で第 1,2 回では遺跡の北側部分 3 回目では隣接する南部分が発掘調査された。

そして、掘立柱建物・土坑などの遺構や、土器、石製品の他、古墳時代後期の土器と一緒に鞆（ふいご）の羽口や鉄滓など製鉄に関する遺物も出土し、この遺跡に生活した人たちがこの辺りでは数少ない製鉄に関わりをもつ人たちであったことが明らかになった。

また、第 3 回目の調査では 6 世紀半ば古墳時代後期の鉄の村が出土し、掘立柱建物 18 棟 井戸 7 基 埋没古墳 1 基と多数の溝と土坑などが出現。第 1,2 回の調査結果と合わせ、若王寺遺跡の集落全貌がほぼ明らかになった。

この若王寺遺跡は古墳時代初頭から古墳時代末期にかけて営まれた集落で竪穴式住居が 1 つもない掘立柱建物の集落というきわめて特徴的をもっている。そして 出現した村では焦土面が広がり、鉄分が散らばり、多数の溝が集落の中を走り、幾つかの井戸も見つかっている。はっきりしてはいないが、溝で囲まれた区画が一つの単位とする鍛冶工房が広がり、残念ながら 炉の跡はまだ見つからないが、溝の中などから 羽口や土器と共に多数の鉄滓や見ついている。

表 4 若王寺遺跡出土鉄滓の分析結果

成分	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	MnO
試料 1	54.10	1.47	48.12	21.78	17.48	4.61	1.10	0.90	0.18
試料 2	37.63	0.98	26.62	21.82	27.80	4.41	1.21	3.22	0.17

成分	TiO ₂	V ₂ O ₅	Ni	Cr	Cu	P	S	灼熱減量
試料 1	0.36	tr	tr	0.008	0.078	0.145	0.021	—
試料 2	0.44	tr	tr	0.015	0.050	0.230	0.028	5.86

(注) ① 単位はパーセント。
 ② T. Fe=全鉄分 M. Fe=全鉄分 tr=痕跡
 ③ 分析は日本鋼管株式会社分析研究所。



若王寺遺跡の溝の中から出土した鉄滓例と出土鉄滓の分析例

炉が出土していないことや鉄滓の詳細な調査結果がないので、この村で製鉄が行われていたかどうかは良くわからないが、他所で製錬された鉄塊がここで不純物を除去する「鍛冶の村」であったと考えられる。

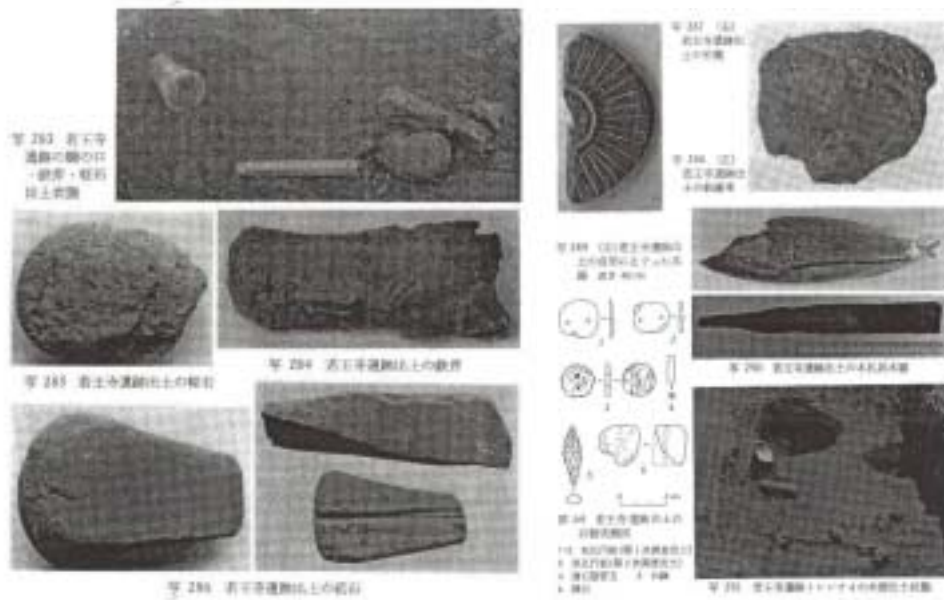
また、出土した多数の土器の中には数多くの韓式の土器が多数含まれていたことと合わせて考えると、渡来の技術工人が多数暮らす先端の鍛冶集団の村と考えられる。

双孔円板や紡錘車が玉砥石と呼ばれる碧玉や滑石などを加工する砥石と共に出土し、鉄だけでなく石製品の加工や製塩なども行われていた。



写 243 若王寺遺跡出土の積の口

写 244 若王寺遺跡出土の鉄滓



古墳時代 畿内の先進鍛冶工房 若王寺遺跡の出土品



【参考資料】

1. 尼崎史誌 11 巻 「若王寺遺跡」
2. 兵庫県埋蔵文化財センター調査報告「若王寺遺跡」
3. 兵庫県埋蔵文化財センター「若王寺遺跡」現地説明資料

2. 古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡 Walk 2005.6.8.



猪名川の分流 藻川 園田橋周辺



古墳時代の鍛冶集落 若王寺遺跡

6月8日午後 若王寺遺跡周辺を歩こうと阪急塚口駅に下りる。

「若王寺」と書いて「なこうじ」と読む。古い古い集落である。目的の若王寺遺跡は旧の電総研の建物が建っている場所で阪急塚口駅より南東へ2kmほどのところ。地理的には良く知った場所であるが、もう何十年も足を踏み入れたことなし。

「若王寺」の集落のあたりは今どうなっているのだろうか??? 久しぶりの尼崎である。

塚口駅の東 阪急の線路の南側に上坂部・若王寺の集落が続く。今は「近松の里」上坂部の集落の近松門左衛門の墓がある広済寺や若王寺遺跡と同時期の5世紀頃 この地を収めた豪族前方後円墳の伊居太古墳を通過して東へいけば直ぐに若王寺遺跡である。



若王寺遺跡周辺地図

さらに東へ藻川の土手まで行って 引き換えして下坂部弥生集落遺跡を探して区画整理による市街化で今一番尼崎で変化した潮江から JR 尼崎へ。

塚口駅から東の尼崎と伊丹・川西を南北に結ぶ産業道路にでて、福知山線を渡って 森永製菓の工場の前に出て、南東へ上坂部の集落・近松門左衛門の広済寺を抜けて行けば 若王寺の電総研のあたり。南側に東西に走る名神高速道路の手前なので間違うことはない。

高校時代良く行った界限 半分昔を思い出しながらのWalkである。

塚口駅から20分ほどで産業道路・福知山線を渡って森永前から南へ上坂部の集落をぬけると近松公園の森。良く整備された公園の南端に近松門左衛門の像と広済寺。

もつとせせこましい集落の中にお寺があったと思いましたが・・・。



近松の里 近松公園と近松門左衛門像 2005.6.8.



広濟寺と近松門左衛門の墓

近松は尼崎」と小さい時から聞いて育ちましたが、尼崎のほかにも近松祭がある街がある。
7年間程赴任した山口県美祢の隣町 日本海に面した美しい海岸の「長門市」もまた、近松の街。
近松門左衛門生誕の地で毎年近松の祭が街を挙げて行われていること関西で知っている人は少ない。

近松の里へ足を踏み入れた時には、お寺から木魚の音が響き、広濟寺の本堂には、ぎっしりと人が詰まって、
ちょうど例月の祈祷会。また、近松公園の木々の間では大勢の年寄りが将棋晩を取り囲んで午後を楽しんで
いました。

最近の集落の公園という人影がないか、人が下があっても ぼつんと老人が手持ち無沙汰に座っているイ
メージですが、ここ近松の里では寺の木魚の音が響き、多くの人影と会話が交わされていて 小さな寺と共
に集落が生きていると感じました。近松の里が今も生き生きしているのがうれしい。

近松公園を抜けて 300 メートル程西の神社の森が伊居太古墳の上にある伊居太神社。全長約 93m の阪神間最
大の前方後円墳の上に神社があるわけであるが、周囲を家並みに囲まれて、まったく古墳の形が見えなくな
っている。また、社殿建築のため、古墳そのものの原形も失われているが、5 世紀頃 この地を収めた豪族
の墓と見られ、隣接する鉄鍛冶工房 若王寺遺跡や弥生時代から続く集落 下坂部遺跡などを支配していた
とも見られる。 埴輪片・土師器片・須恵器片や鏡・鉄剣が出土したと言われるが、詳細は良く判らない。



5 世紀頃この地を治めた豪族の墓 伊居太古墳(前方後円墳)の上に建つ伊居太神社

池田市にも高麗の織姫穴織媛を祭る伊居太神社があり、この伊居太神社から遷座したととの説がある。隣接する鉄鍛冶工房若王寺遺跡には数多くの朝鮮半島からの渡来人の系譜があり、これらを考え合わせるとこの地を治めた豪族も渡来系であったかも知れない。

伊居太神社前から住宅街を東へ 300m ほど行くと道の北側に茶色の高い建物のある英知大学 南側にコンクリートと網で出来た塀に囲まれた一角が見え、その塀に「若王寺遺跡」の説明版が貼り付けられている。



「若王寺遺跡」現 関西電力総合技術研究所の西北の端 2005.6.8.
 「若王寺遺跡」の説明版が塀に埋め込まれている

塀に沿って東へ歩きながら、塀の中を覗き込むが、平地の広場とその向こうに研究所の建物が並んでいるだけで、予想はしていましたが、全く遺跡の痕跡はなし。

この東半分には大きな鉄塔を上に乗せた関電総合研究所本館ビルがあり、その前庭にも「若王寺遺跡」の説明板が整備されている。



関電総合技術研究所本館前の「若王寺遺跡」の説明板 【1】 2005.6.8.



古墳時代の鍛冶集落 若王寺遺跡

関電総合技術研究所本館前の「若王寺遺跡」の説明板 【2】 2005.6.8.

説明板の図面からすると この関電総研のある1ブロック 南半分が電総研の敷地で ちょうどその境あたりブロックの中心が「若王寺遺跡」発掘調査地の様である。今は完全に会社の敷地内で建物が建っており、遺跡自体は破壊されていると見える。

汚れた説明板がここが5世紀頃の鉄鍛冶工房の跡で掘建柱の工房や高床の倉庫跡や井戸跡などと共に羽口や鉄滓などの鉄関係遺物や土師器・須恵器や鏡・剣が出土したことが説明されている。

でも この遺跡が畿内のほかの鍛冶工房と共に大和王権が日本統一して行く黎明の過程で鉄の供給基地としての重要な役割を担ったことまたその任の技術集団として朝鮮半島からの渡来人が多数いたことなど「日本誕生に関わる先進製鉄遺跡」「鉄の街 尼崎」のマニユメント遺跡であることなどについては触れられていない。(もっとも そんな 明確な証拠があるわけではないが・・・)

ちょっとさびしい感じがする。



東側中央部 関電総研と電総研の境付近



南側 電総研(現産業技術総合研究所関西センタ)



南側の現産業技術総合研究所関西センタ側からの「若王寺遺跡」の現況 2005.6.8.

以前 福島県の東電原町の発電所へ行った時に工場内に製鉄遺跡が部分保存され、発掘調査結果が郷土の遺跡として立派な冊子にまとめられているのを思い出して、本館の受付へ行ってゆく。

「若王寺遺跡」について教えを請いましたが、総務の方がわざわざ出てきて 丁寧に対応していただきましたが、関電サイドには全く調査記録もなにもないとの事でした。電総研でも同じでした。

「若王寺遺跡・日本を作った古墳時代の先進鍛冶工房遺跡の一つ」への私の思い入れが強いのか、ちょっとさびしい限り。せめて 関電総研の前の案内板には 古びて見えかかった記述から 時代背景・遺跡の役割の記述も含め、きれいに整備してほしいもの。

「若王寺遺跡」のあった関電総研・電総研の敷地をぐるりと一周してから、遺跡の東北を流れる猪名川の分流 藻川の土手へ。



若王寺遺跡の北東 藻川 園田橋周辺 左 北西側 右 南東側

遺跡から 500 メートルほどなのですが、小中島の地名が残る。山陽新幹線をくぐり 15 分ほどで藻川の園田橋。北東の川筋の向こうには遠く六甲の山並みが見える。

何処を向いても家並みが続き、このあたりが、昔 大阪湾の海岸線の島が点在する低湿地帯とは想像がつかないが、川に沿って山陽新幹線 北には阪急 南には名神高速道路が走り、今も西国と大阪・京都を結ぶ交通の結節点。

古代には大陸や朝鮮半島の先進文化や人たちが海を渡ってこの地を通って畿内へ入ってきた。大阪湾奥のそんな要衝の地。

猪名川河口の低湿地帯には下坂部など漁労と農作で暮らす数々の集落群が広がり、多くの渡来人も渡り住み、伊居太古墳に埋葬された豪族が支配する先進の土地。



たたら製鉄黎明の技術痕跡を見ることは出来ませんでした。古墳時代 鉄器を大量に供給して日本誕生に大きな役割を演じた畿内の先進鍛冶工房群。

今はもう住宅街の中に埋没してしまっているが、そんな要衝にあった古代の先進鍛冶工房遺跡 日本の製鉄技術・文化に新風を吹き込んだに違いない。



弥生後期から古墳時代松まで続いた猪名川最南の集落 下坂部遺跡 2005.6.8.

藻川の岸から南へ小中島の集落を抜け、次屋・下坂部の集落から潮江を通過して JR 尼崎へ 昔の記憶を頼りに歩くのですが、区画整理が進み、大きな道が出来てまったく道筋がつかめない。集落の中に入ると知った建物もあり、昔のことが次々と記憶の中に浮かび上がってくるのですが、スポット的で まったくの浦島太郎。JR 尼崎駅北潮江のビル群の新しい街は知っていましたが、その北の尼崎北部も大きく変貌。

まあ ふるさとの街を歩くのは新しい発見の驚きとさびしさの半分づつでした。

2005.6.8.

Mutsu Nakanishi